

『今月の天候と農作業』

通巻第5654号
8月号
令和3年7月29日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<1 週目の予報> 7月31日(土)～ 8月6日(金)

上空の寒気や湿った空気の影響で雲が広がりやすいでしょう。

<2 週目の予報> 8月7日(土)～ 8月13日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 8月14日(土)～ 8月27日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、
週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

普通作物

◆普通期水稻

1 水管理と追肥

出穂期直前までの水管理は、根を健全に保つために間断かん水が基本です。出穂期前後は十分に水を保ちましょう。また、台風の際は深水とし、吹き返しで高温・乾燥風の恐れがある場合は、風が止むまで深水状態を保ちましょう。

追肥（穂肥）の適期は、ヒノヒカリでは、幼穂の長さが約1 cmの時期です。施肥量は葉色を見て判断します。収量や品質・食味に大きく影響するので、適期に適切な量を施用しましょう。なお、一発型の基肥では穂肥は不要です。

出穂後に高温になると白未熟粒による品質低下が発生しやすくなります。十分な用水があれば、冷水掛け流しや水田内で高温になった用水の入替えを行いましょう。

2 病虫害防除

いもち病は出穂前と穂揃期頃に防除します。紋枯病は、出穂前に防除します。

昨年、トビイロウンカ（秋ウンカ）による大きな被害が出ました。株元に生息し、増殖率が非常に高いので、防除情報やほ場での発生に注意してください。基幹防除を基本に、発生が多い場合は臨機防除を行います。また、カメムシ類は穂揃期とその7～10日後の2回防除しましょう。

◆大豆

1 中耕・培土等

雑草対策や発根を促すため中耕・培土を2回行います。1回目は本葉3葉期に第1節の位置まで、2回目は本葉5葉期に第3節の位置までが作業の目安です。播種が遅れたほ場では、培土の高さは収穫時の刈刃位置も考慮します。また、ほ場の排水溝も整備しましょう。

2 病虫害防除

ハスモンヨトウ防除は若齢幼虫時が効果的です。幼虫食害による網目状の被害を見つけたら直ちに防除します。

◆そば

播種時期は山間地域で8月上中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。

そばは排水対策が非常に重要ですので、播種前の排水溝の設置などの対策をしっかり行います。播種は天候を見ながら行い、播種量は10坪当たり条播が6キロ、散播は約10キロが目安になります。

（福川 泰陽）

施設野菜

◆施設野菜全般

施設野菜は次作の植え付けに向けて、土壌消毒や施設の修繕、施設周りの環境整備などを行います。特に、防虫ネットの破損により、施設内に害虫が侵入して、ウイルス病が蔓延することがあるため、防虫ネットの修繕や張り替えを行います。

◆露地きゅうり

夏のきゅうりの生育は早く、収穫や摘葉、防除を徹底し、草勢低下を起こさないようにしましょう。病虫害では、べと病や炭疽病などの病害が発生しやすいので、定期的な農薬散布や下葉や垂れ枝の除去などこまめな管理が必要です。

◆夏秋ピーマン

雨よけ栽培での夏秋ピーマンは、施設内の温度上昇による尻腐果の発生や草勢の低下が起こりやすいため、寒冷紗による遮光や循環扇の利用、妻窓の開閉などを行うなど、温度管理に注意しましょう。また、徒長しやすい草勢の時には、こまめに主枝更新を行いながら、流れ果の発生を抑制して、収量の確保に努めましょう。

◆いちご

鉢内の培土が乾燥しやすくなるため、午前中に十分なかん水を行います。高温による乾燥には十分注意し、水がかかりにくいところは手かん水を行うなどこまめな管理が必要です。また、緩効性肥料等を置肥する場合は、今月中旬までに施用します。極端な肥料切れは苗質に大きく影響しますので、苗の生育状況に応じて、液肥の葉面散布等を実施しながら、今月中旬までに切り離しを行い、健苗の確保に努めましょう。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆秋冬野菜の土づくり

秋冬野菜の植付けに向けて土づくりを行う時期です。物理性、化学性、生物性の改善の視点で土づくりを行うことが重要です。播種や定植の約一ヶ月前までに完熟堆肥や石灰資材を施用して、土壌改良をしましょう。

◆加工にんじん

内陸地帯では8月上旬、沿海地帯では中旬～下旬が播種の適期となります。にんじんの種子は発芽率が低いうえ、土壌が乾燥及び過湿の状態では発芽率が低下しやすいので、適度な水分を持たせた状態で耕うん・播種します。

播種深度は1.5cmが適しています。また、発芽が揃うまでは地表面の乾き具合を見ながら適宜かん水を行います。

◆食用かんしょ

4月に植え付けたかんしょの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなるため適期に収穫しましょう。

ヨトウムシ類が多発する時期になるので、若齢幼虫期に薬剤防除を行います。また、地際の茎や芋の腐敗、立ち枯れが起きている株は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにしましょう。育苗ほは気温の高い夏場の内に残渣分解を行きましょう。なお、種芋を採取するほ場は、特に、病害虫の発生状況の確認や異常株の抜き取り、薬剤防除を徹底しましょう。

◆さといも

マルチ栽培の石川さといもは収穫が遅れると「水晶芋」や「割れ芋」により品質が低下するので、8月中旬までには収穫を終えましょう。

中生種では8月の土壌水分量が収量・品質に大きく影響します。土壌の乾燥により、「芽つぶれ症」が発生しますので、散水を行ってください。なお、地上部が繁茂し疫病が蔓延しやすい状態なので、排水対策の徹底や大雨及び台風後には治療剤の散布を行きましょう。

(川崎 佳栄)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

極早生品種のMサイズを目標とした果実横径は、8月10日の時点で50から56mmが理想です。果実肥大の状況や結果数に応じて、仕上げ摘果の時期や程度を調整しましょう。

◆ 完熟きんかん

初期肥大を促すため、かん水は定期的にとっぴり行いましょう。また、す上がり対策として、遮光資材等を活用し33℃以上の極端な高温を回避しましょう。8月下旬からは、傷果と一節二果なり果を中心に荒摘果を開始しましょう。

◆ マンゴー

7月下旬以降の剪定は、新梢の充実が不足し、花芽形成が不安定になります。収穫終了後は速やかに剪定を行い、葉面散布や新梢の整理、発根促進剤の利用によって、新梢の充実促進を図りましょう。

既に剪定が終了した早期出荷園では、十分なかん水と葉面散布を行いましょう。

2 落葉果樹

◆ ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の生育にも影響を及ぼします。病害虫の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

◆ クリ

今月から収穫が始まります。収穫は毎日行い、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病害果や腐敗果を減らしましょう。

3 台風対策

防風ネットの点検や、冠水対策として排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、効果が高い台風襲来前に実施しましょう。

(鈴木美里)

花 き

◆夏秋ギク

強日射により、成長点付近の葉焼け発生リスクが高まりますので、遮光や換気、葉面散布、かん水等の対策を遅滞なく実施してください。

9月出荷作型では、多肥や高温により貫生花や扁平花などの奇形が発生しやすいので、過剰な施肥を控えるとともに、遮光や換気等を積極的に行いましょう。

◆秋ギク

各作型の作業計画に応じて、育苗、冷蔵、定植などの作業を計画的に進めてください。

なお、穂冷蔵時の温度は2～4℃とし、冷蔵期間は開花遅延を防止するために3週間までとしまし
よう。

また、高温時の穂の安定確保のために、摘心・採穂時にベンジルアミノプリン液剤を適宜茎葉散布
しましよう。

◆ホオズキ

土壌伝染性ウイルス病が発生したほ場では、出荷終了後に腐熟処理を実施してください。なお、残
さ分解促進に際して、カーバムナトリウム塩液剤や微生物資材の利用が効果的です。

また、次作に実生苗由来地下茎を利用する場合は、発芽揃いを良くするために、早めに播種を行
いましよう。

◆スイートピー

品種と植え付け予定日にあわせて催芽処理・種子冷蔵を行います。

充実した大きい種子を選び、吸水処理は必ず流水中で行ってください。また、冷蔵庫のセンサー故
障による低温感応不足を防止するために、事前に必ず冷蔵庫の庫内温度を確認しておきまし
よう。

植え付け前の準備作業として、数日前から遮光やかん水を行い、ハウス内温度や地温をあらかじめ
下げるようにしましよう。

◆デルフィニウム

中山間地では定植が始まります。高温による早期抽だい防止のために、ハウス内の換気や遮光を積
極的に行いましよう。

◆キイチゴ

秋出荷に向けて、弱枝や不良枝の整理を行います。その際、一度に実施すると株にストレスがかか
り、場合によっては枯死する場合がありますので、樹勢維持のために充実したシュートを3～4本程
度残すとともに、数回に分けて作業を実施しましよう。

また、乾燥ストレスを軽減して萌芽を促進するために、必要に応じて通路かん水を行いまし
よう。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

七月八日に、神奈川県で豚のCSF（豚熱）の六十九例目が確認され、野生イノシシにおけるウイルスの感染拡大も継続しています。家畜伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。

◆家畜

今月は、本格的な夏を迎え、家畜や家禽の生産性が低下する時期に入ります。畜舎への風の通りを良くするために、換気扇等を動かすとともに、暑熱対策として畜舎内へ直射日光が入らないように寒冷紗の設置や、輻射熱を抑制するために屋根への散水、石灰塗布等が有効ですので、ぜひ、取り組みましょう。

また、夏場は全ての家畜で、必要な給水量が多くなります。そのため、水槽やウォーターカップをこまめに清掃し、いつでも、新鮮な水が飲めるようにしましょう。

さらに、飼料が腐敗しやすい時期になります。カビの発生しているものや、色や臭いが悪いもの、熱をもった飼料は、絶対に給与しないでください。

ハエに加え、サシバエやアブなどの吸血昆虫も増えてきます。害虫対策としては発生源をなくすことが重要です。ハエは、堆肥舎はもちろん、飼槽の食べ残しや通路にこぼれたエサも発生源となりますので、飼槽や牛舎内の清掃をこまめに実施しましょう。サシバエやアブは草むらが発生源となりますので、牛舎周辺の草刈りを実施しましょう。それでも害虫が発生した場合には、駆除用の殺虫剤を活用した対策を実施してください。

◆飼料作物

飼料用トウモロコシの収穫作業の時期になります。暑い中での収穫・調製作業になりますので、体調管理をしっかり行い、適宜、休憩を取りながら農作業安全を心がけて、作業を実施するようにしてください。

(藤井 真理)

特用作物

◆茶

これからの作業は、来年の一番茶の母枝となる秋芽の充実と葉層や芽数の確保を図るために大変重要です。

1 最終摘採と干ばつ被害防止

秋芽の生育期間を確保するため最終摘採時期は、中山間地域で七月中旬、その他の地域で八月上旬が目安です。また、遅れ芽や徒長枝は秋芽を切らないように注意して整枝します。高温・乾燥は、秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、七日おきに二五～三〇ミリの散水が効果的です。

2 病害虫の防除

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病、輪斑病等の病害虫が発生しやすくなります。秋芽萌芽期と二～三葉期頃の二回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防

除します。網もち病の発生が多い茶園では、四～五葉期頃にもう一回追加防除を行います。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が徐々に拡大しています。この害虫は茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回りますので、茶園の観察に努めましょう。

なお、チャトゲコナジラミに関する問い合わせは、最寄りの農業改良普及センターへお願いします。

3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では九月上旬までに、これ以外は九月中旬までに、土壌診断結果を考慮し地域の施肥基準に準じて施用します。土壌が固く根量が少ない茶園では、九月上旬を目安に堆肥を一～二トン施用し深耕します。加えて、苦土石灰による pH 改善にも取り組みましょう。干ばつ等で樹勢低下が見られる茶園は、液肥の散布が効果的です。

(松尾 啓史)

◆しいたけ

しいたけの菌糸は、高温に弱く、夏場の高温により、ほだ木内の温度が三五℃以上になると菌が死滅する恐れがあります。また、高温によるほだ木の乾燥は、しいたけ発生量の減少や品質の低下につながります。このため、伏込地の笠木の補充や遮光ネットの設置により、直射日光による高温障害を防ぎましょう。特に西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。

また、台風通過後は、伏込地を見回り、笠木の薄くなった部分の補修を行いましょ。

夏場は、害菌が発生しやすい時期ですので、ほだ場をこまめに巡回し、被害が見受けられた場合は被害木を取り除くとともに、伏込地周囲の除伐や下刈りを行い、風通しを良くし、害菌の発生を防ぎましょう。

(堀川 和也)

◆たばこ

今月は、残幹処理や夏期深耕、並びに、今月末から開始される葉たばこの販売に向けての出荷規格確認などが、主な作業になります。

一 病害の耕種的防除のため、総かぎを終了したほ地から残幹処理を行いましょ。その際には、すみやかに残幹根ごと、ほ地外へ持ち出しましょ。また廃マルチについては、市町村が定める期日・場所にて適正に処理しましょ。

二 夏期深耕は、土壌中の病原菌密度低下や、土作りのための重要な作業となります。スキ等による反転深耕を行い、十日置きにロータリー等による砕土を行うように努めましょ。特に、今年立枯病などが出たほ地については、念入りに行いましょ。

三 貯蔵害虫発生防止のため、セリコは販売終了まで設置し、飛来予察に努めましょ。葉たばこに成虫や食害痕、排せつ物があった場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行ってください。また、貯蔵中の吸湿防止のため、全包ポリ袋梱包を行いましょ。

四 販売に向けて、出荷包の確認を行いましょ。異物異臭、水分の確認と、土砂付着や腐れなどの手入れ不足がないかを確認しましょ。あわせて、販売見込票を作成してください。

また、普通系に色損系（グレー葉、よごれ葉など）が混入していないか確認し、混入している場合は、ピッキングを行いましょ。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。
(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病(葉)	並	箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ (秋ウンカ) セジロウンカ (夏ウンカ) コブノメイガ	並 やや少 並	トビイロウンカは、5月中旬に初飛来を確認後、6月下旬にわずかな飛来が確認されましたが主要飛来と言えるようなまとまった飛来は確認していません。わずかな飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場での発生に注意します。 セジロウンカは7月上旬にまとまった飛来が確認されています。 ウンカ類の第2世代の防除適期は8月中下旬頃と予想されます。
野菜類等	アブラムシ類 ハスモンヨトウ等の チョウ目害虫	やや少 やや少	アブラムシ類は、ウイルス病を媒介し、大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。 ハスモンヨトウのふ化直後の若齢幼虫は葉裏を集団で加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。
さといも	疫病	—	県内各地で発病が散見されています。登録薬剤による継続した防除を徹底します。
かんしょ	基腐病	—	発病株(つるや塊根)は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにしましょう。また、発病株を除去したあとは、感染拡大を防止するために登録薬剤による防除を実施しましょう。
カンキツ類	かいよう病	やや多	台風による茎葉の損傷は、かいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。 黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、薬剤散布後の積算降水量が250mmになると次の防除が必要です。 ミカンハダニは、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5~1頭)での防除がポイントです。
	黒点病	並	
	ミカンハダニ チャノキアザミウマ	並 並	
茶	炭疽病 もち病 輪斑病	やや少 並 やや多	炭疽病は秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。 チャノホソガの発生が多くなっています。ハマキ類の防除適期は、発蛾最盛期から7~10日後の幼虫孵化期になるので、多発園では幼虫の発生状況を確認して防除します。 カンザワハダニは低密度での防除に努めるとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノキアザミウマはこの時期、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果が劣るので、残効性の長い薬剤か1週間間隔での連続散布を行います。
	チャノカクモンハマキ、チャハマキ	並	
	チャノホソガ	多	
	カンザワハダニ	並	
	チャノキアザミウマ	並	
チャノミドリヒメヨコバイ	やや少		
クリシロイガラシ	やや多		
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnpn.ne.jp/miyazakiです。</p>			